

市之瀬 敦  
Atsushi Ichinose

# 気になる言葉から、 こだわる言葉へ



街の中心ジョアン三世広場にはミランダ郷土博物館があり、学芸員に二〇年前と同じ質問をしてみた。「この辺りにミランダ語を話せる人はいますか?」。ミランダ・ド・ドー

市内にはミランダ話者がいないことは研究論文などにも書かれているのだが、最近では市内にも話者が暮らすようになり、ミランダ・ド・ドーもミランダ語地域に含めても良いのではないかという主張も散見されるようになってきた。だが、答は「周辺の村に行けば老人たちがまだ話していますよ」というものだった。道行く老人や警察官にも同じことを訊ねてみたが、やはり同様の答しか返ってこなかった。ミランダ話者は誰もミランダ語を話さず、地理的にスペインに近いためスペイン語を話せる人も多い。実際、物価の差を利用してミランダ・ド・ドーに買い物に来るスペイン人旅行者の姿を見ることは稀ではない。市内ではミランダ語は聞けなくとも、スペイン語はいくらでも耳に入ってくるのだ。

さて、私はがっかりしたものの、気を取り直し、タクシイ乗り場へと向かった。ポルトガルでも最近増えてきた女性ドライバーに、「ミランダ語を聞きたいので南隣のドウアス・イグレイジャス(ミランダ

ポルトガル北東部、ドーロ

川を挟んでスペインと国境を

接する街ミランダ・ド・ドー

口を初めて訪れてからも二

〇年近くになる。あの頃には

べれば、国境の存在意義もだ

いぶ薄れたはずだ。たった一

泊の短い滞在、午後に着、翌日の早朝には出発するとい

う慌しい旅だった。当時からすでに私は、「少数言語」に関

心があった。ポルトガルの辺

境に残る、ポルトガル語の方

言ではないのにポルトガル領

土内の「土着」の言語である

ミランダ語に興味を抱いてい

た。残念ながらその旅ではミ

ランダ語を耳にすることができ

ず、博物館の女性学芸員の優

しい笑顔とミランダ語で書か

れた小冊子だけが旅の成果と

なった。しかし中心的な研究

テーマになることはなかった

ものの、以来ずっとミランダ

の言葉もその土地もどこか

気になる存在ではあった。

昨年どうしてもミランダ・

ド・ドーロに行かなければな

らない事情が生じ、九月上旬

に予定していたポルトガル旅

の日程にまたしても小さな

旅を組み込むことにした。ワ

インとサッカーで知られる北

部の港市ポルトからバスに揺

られること五時間、終点ミラ

ンダの広場に着く。ポルトカ

ラミランダまで「完走」した

のは私一人だけ。以前と比べ

道路の整備も進み、山間部を

走る一時間くらいを除き、き

わめて快適な旅だった。ちょ

っと驚沢をして、かつての城

や宮殿跡を改装し宿泊施設に

変えたボザータに泊まること

にしたが、ヘランタからは

ドーロ川沿いに屹立する高い

岩壁、そしてダムが目の前に

## 愛書狂

太宰治『女学生』から橋本

治『桃尻娘』まで、「女学生

言葉が文学を救つ」という説

を唱えているのは作家の高橋

源一郎氏である。これは三島

賞を受賞した舞城王太郎『阿

修羅ガール』をめぐるっての発

言なのだけども、「サイト」冬

号(一〇〇三年の文芸界を

ふりかえってみると、『阿修

羅ガール』のみならず女学生

が大活躍のだった。たとえ

ば丸谷才一『輝く日の宮』。

小説としては全然感心できな

かったけど、これの冒頭に出

てくるのは、女子高生が泉鏡

花の文体を真似して書いたと

いう短編小説もどきである。

丸谷才一ですら女子高生を真

似る時代だというのが、ある

意味象徴的である。『輝く日

の宮』と泉鏡花賞を同時受賞

した桐野夏生『グロテスク』

も名門女子校の内部で展開す

るドラマが山場のひとつだつ

た。女学生は意外な場所にも

潜伏している。阿部和重『シ

ンセミア』に今っぽさを持ち

こんでいるのも女子高生。矢

作俊彦『さらさら科擧の子』の

重苦しさも救っているのも女

子高生。まさかそこまで進出

してはいないだろうと思っ

ていた横山秀夫『クライマーズ

ハイ』にさえ、最後のほうに

新聞記者志望の女子大生が登

場してきて男たちのドラマに

風穴をあける。純文学もエン

タテインメント系も、長編小説

は女学生なしでは成立しない

いかのよう。まあ言葉の面

でも存在としても、現在もつ

もラジカルに見えるのは女学

生だから、つい頼りたくなる

のでしょね」と考えていて

思い出した。〇三年のベスト

セラー小説もそういえば女学

生ものだったのだ。『世界の

中心で、愛をさげぶ』と『D

ee p Love』。こうな

るともう、文学を救ってるん

だかダメにしてるんだかわか

りませんけど。

(洗)

(筆者)上智大学助教授

# 名画誕生とその後の波瀾万丈を追う

## 「ピカソの戦争『ゲルニカ』の真実」

ラッセル・マーティン「著」



一九三七年四月二十六日、スペイン・バスク地方の古都ゲルニカが、ナチスの爆撃機により無差別に空襲され、多数の死傷者を出した。その後もゲルニカは焼けた瓦礫の山にならなにもかもが灰燼に帰した。

その前年には、フランコ反乱軍のクーデターからスペイン全土は内戦に様相を転じ、欧州ではファシズムの嵐が吹き荒れていた。既に名声を博し、パリに在住していたピカソは、フランコと憎みあっていたが、祖国や故郷、闘牛を愛し、その行く末を常に案じていた。ゲルニカの悲報がピカソに与えた衝撃は計り知れないものだった。近く開催されるパリ万博のスペイン館に出品する壁画を依頼されていたピカソは、ゲルニカに起こった惨劇、想像を絶する恐怖にさらされた犠牲者に思いをはせ、



# 新しき「神殿」の誕生

## 「ミュージアムの思想」

松宮秀治「著」

ヨーロッパのミュージアムでは所蔵品が可能な限り展示され、しかもガラスケースで隔離したり、写真撮影を禁じたりせず、ものによっては自由に手に取ることが許されている。日本の博物館や美術館などに慣れきっている目には、西欧のそれはじつに開放的で、民主主義的なものとして映る。なぜこのような違いがあるのか。

日本などの非西欧圏のミュージアムはコレクションを秘匿することとその神聖性を高めていくのに対し、西欧においてはコレクションを公開することで、為政者の権威を示す政治的な目標となつていく。つまり西欧のミュージアムとは、コレクションを「公開性の原則」から人々の視線にさらし、それに社会的な公認の価値を与えるための装置なのである。

また「ミュージアム」は、通常日本では美術館や博物館を示す語として用いられるが、その二つのみならず、図書館、動植物園、水族館、歴史遺跡、さらに自然保護区や少数民族保護区、「世界遺産」などを含む広領域の概念であり、西欧のみが創り出した全世界の一元化を目指す思想である。それは一方で大英博物館に代表されるような自然の征服へとつながる研究機関として、また一方でルーヴル美術館に代表されるような国民国家形成のための威信装置として複合的に発展していく。

本書は、このミュージアムという思想がいかにして生まれ、拡大発展しつづけていく思想であるかを、王権と教権の関係や精神分析学、ユートピア文学やアード論など多岐にわたる問題に触れながら読み解いていく刺激的な論考。十六世紀以降のヨーロッパ史の最も基礎的で、最も深層的な問題を考えるうえで必読の一冊。

四六判 二七六頁 定価二六二〇円（本体二五〇〇円）

# 本はかつて鎖につながっていた！

## 「本棚の歴史」

ヘンリー・ペトロスキー「著」



書齋で、書店で、図書館で、人は本を目を向けはするが、それを収めている本棚にはさほど関心を払わない。著者ペトロスキーは鉛筆の進化の歴史をたどった名著『鉛筆と人間』で知られる、有用な身の回り品についての文化史家だが、これはその彼が、見過ごされてきた書物の収納の歴史を探索するユニークな書である。

本棚の歴史は言うまでもなく本の発達史と手を携えて進んできた。古代ローマの時代には文書は主にパピルスで作られた巻き物の形をしており、読まないときは紐でくくられて帽子入れのような箱に縦置きされたり、棚に寝かせられた。西暦紀元の初めの数世紀には綴じた手写本（コックス本）が増加し、巻き物と共に扉付きの戸棚にしまわれたが、この戸棚はラテン語でアルマリウムという名で知られた。中世になると修道院で聖職者が本を読む姿が写本などに描かれるが、貴重な本はアルマリウムや小型トランクに似たチェスト（保管箱）に入れて鍵をかけられ、貸し出しには高位聖職者の許可が必要とされた。さらに時代が進むと、本は教会の信徒席のよ

# スローでローカルな風土食

## 「日本の風土食探訪」

市川健夫「著」



最近よく使われる「スローフード」という語は、今から二十年前近く前にローマで生まれた。某ファーストフード店がオープンした際、これを脅威に感じたイタリア人が口にしたのが最初だが、その後、北イタリアの小さな村で「スローフード協会」が発足し、いまやその運動は世界各地に広がっている。

長野県立歴史館館長であり、日本各地の風土食を研究している本書の著者は、つぎのようにいう。「その地域で生産された食材を用いて、独特の調理法でつくられた食物を『風土食』と呼ぶ。これはまさにローカルな風味を意味している。（はしがきより）早くて手軽なファーストフードにたいして、時間や手間のかかるスローフードは、『風土』に根ざした食材、調理法、そして食べ方にその特徴がある。『グローバル』なファーストフードにたいして、スローフードは徹底的に『ローカル』である。

本書は、米、大豆など馴染みの食材から、蕎麦、木の実、柑橘類、川魚、昆虫食にいたるまで、失われつつある日本古来の食物と食文化の多様性を論じている。内容は次のようなものである。

晴の食としてのお餅／『東海道五十三次』に描かれた名物／小布施栗と栗菓子／大豆、小豆、隠元豆／文旦酢／柚子／清酒と凍み豆腐／葛粉と蕨粉／桜の食文化／国民的な食品、豆腐／山の芋／胡瓜と苦瓜／鯖街道と鯖の食文化／蝗と蜂の子（ほか全48章）

四六判 二〇六頁 定価三三二〇円（本体三二〇〇円）

# 軽妙なる哲学的エッセイ

## 「イデーの鏡」

ミシェル・トゥルニエ「著」



「イデー」idee、とはフランス語で「考え、観念、概念」という意味。英語のアイデアideaにあたり、哲学者用語で使われるイデーのことである。

本書は、『魔王』、『黄金のしずく』などの小説で知られる、フランスのゴシック小説作家ミシェル・トゥルニエが、「男と女」「愛情と友情」「ネコとイヌ」「スフィンクスとフォーク」「風呂とシャワー」などの具体的で分かりやすい対立概念五十八組を通して、含著とエッセイに富んだ思索を繰り広げる哲学的エッセイである。そして短い各エッセイの末尾にはスペースの効いた著名人の引用が付けられている。

著者によれば、五十八組の対立概念をそれぞれ鏡のように向かい合わせることで、その対比において互いがより強調され、奥深い構造が読み取れるのである。また引用されることは作家や哲学者のそれにかぎらず、画家アン

グルや女優ブリジット・バルドーから、かの喜劇俳優クルーゾー・マルクスまで実にバラエティーに富んでいて、そんな遊び心いっぱいの思索の森に入っていくと、最終章では気づくと「存在と無」という最も根源的な対立概念も理解できるようになっているという仕掛け。本書は、思索とはどんなに軽やかで楽しいものであるかということ、ヒューマニズムと滋味に溢れる文章で教えてくれる。

宮下志朗訳 四六判 一四〇頁 定価一五二〇円（本体一四〇〇円）1月下旬発売

# 白水社 みすず書房 青土社

## 3社ジョイントブックフェア2004

開催書店	
札幌	紀伊國屋書店札幌店 (1月10日) 2月10日
仙台	丸善仙台アエル店 (1月15日) 2月17日
東京	八重洲ブックセンター本店 (1月18日) 2月6日
	阪急ブックファースト渋谷店 (1月26日) 2月29日
横浜	有隣堂ルミネ横浜店 (1月中旬) 2月中旬
名古屋	三省堂書店名古屋高島屋店 (1月10日) 2月10日
京都	阪急ブックファースト京都店 (1月28日) 2月29日
大阪	ジュンク堂書店大阪本店 (3月1日) 3月31日
神戸	ジュンク堂書店三宮店 (2月1日) 2月28日
広島	紀伊國屋書店広島店 (1月21日) 2月23日
福岡	丸善福岡ビル店 (1月18日) 2月12日

日頃の出版活動において独自のスタイルを持つ白水社、みすず書房、青土社の三社はこの度共同のブックフェアを開催いたします。

新刊やロング・セラーから日頃店頭で陳列できない書籍など、総点数六〇〇点、総冊数一〇〇〇冊を超える大型ブックフェアとなります。哲学・思想・心理・文学・芸術・歴史・社会・自然科学の各ジャンルに充実した展示となりますので、是非この機会にお立ち寄り下さいますようお願い申し上げます。

# 《書物復権》

## 8出版社連続ブックフェア

岩波書店・紀伊國屋書店・勁草書房・東京大学出版会・白水社・法政大学出版局・みすず書房・未来社の八社による共同企画《書物復権》では、2月より岩波ブックセンター信山社との共催で、各社月替わりの連続ブックフェアを行うことになりました。その第一弾を白水社が担当いたします。話題書を中心としたブックフェア、在庫僅少本・直筆サイン本の展示販売のほか（お買い上げのお客様には粗品進呈）、鹿島茂さんの講演会も開催いたします。ぜひこの機会に足をお運びください。

期間：2月2日(月)～28日(土) 日曜・祭日は休業

場所：岩波ブックセンター信山社 東京都千代田区神田神保町2-3 地下鉄神保町駅下車すぐ 電話03-32263326 66001

鹿島茂氏講演会 2月20日(金) 午後7時より

要電話予約・先着100名様・入場無料

お問い合わせ・講演会のご予約は、岩波ブックセンター信山社へ

# 好評図書 白水社の本棚

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24 / 振替00190-5-33228 / 電話03-3291-7811

### 自伝の書き方

石田修大

定価1995円(本体1900円)

日本経済新聞「私の履歴書」の元担当記者が教える、自伝を書くための知識とコツ。人生の各シーンに合わせた各自伝を多数紹介。

### 日本史不肖の息子

森下賢一

定価1995円(本体1900円)

酒色に溺れ、財を失い、家名を汚す。歴史を飾る偉大な父親たちと、その息子たちの悲哀と葛藤。身につまされるエピソード満載の日本編。

### 別役実のコント教室

不条理な笑いへのレッスン

1月20日重版出来予定

別役実

定価1785円(本体1700円)

「笑い」を書くための実践的な教科書。劇作家・脚本家・放送作家になりたい人はもちろん、「ウケる技術」を身につけたい人のための短期集中講座。

# なつかしの黄色い本

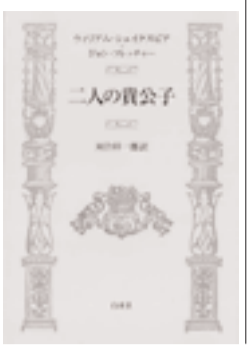
「チボー家のジャック」(新装版)  
マルタン・デュ・ガール作

二十世紀フランス小説史上に残るマルタン・デュ・ガールの大作『チボー家の人々』は、一九二〇年に書き起こされ、十九年もの歳月を費やして完成された。舞台は第一次世界大戦前後のフランス。時代が大きく変動する不安と動揺の時に身をおいた若者たちが、鋭い感受性ゆえに悩み傷つき、そして苦悩の末にそれぞれの決断をし



今回、高野文子氏の装丁により「黄色い本」となつて新装復刊する『チボー家のジャック』は、主人公ジャックに焦点を当て、作者自身が若い読者のために抜粋、加筆、編集を行ない一冊にまとめたものである。分量はおよそ五分の一とコンパクトになっているので、チボー家の世界をちよつとのぞいてみたい方、もう一度読み直してみたい方、またかつて大著を前に挫折してしまった方にお勧めである。そして、本書でジャックと友だちになった読者は、ぜひあの大作に挑戦していただきたい。山内義雄訳 A5変型 函入 三二四頁 定価一八九〇円(本体一八〇〇円)

これまでにイクスピアの戯曲は三十七篇とされてきましたが、最新の研究により、少なくとも二、三篇はあると認められるようになりました。本作『二人の貴公子』は、そのうちの二つで、いままではアーデン版、オックスフォード版、ペンギン版など、主要なシェイクスピアの注釈シリーズに収録されていません。



# 幻のシェイクスピア作品!

「二人の貴公子」  
シェイクスピア+フレッチャー[作]

この作品は、シェイクスピアとフレッチャーの後を継いで国王一座の座付き作家となったジョージ・フレッチャーによって一六一三年頃に書かれたとされています。共作者のフレッチャーは感情の繊細な動きを巧みにとらえるのがうまう、文体はリズムミカルで軽く、音楽的です。とくに喜劇に秀でて作家で、王政復古時代には、シェイクスピアよりも人気を博したといえます。それぞれの執筆箇所は文体の特徴から類推できますし、もちろんシェイクスピアの世界は遺憾なく発揮されています。古代ギリシアを舞台に、従兄弟同士の騎士パラモンとアーサイトが王女エミリアの愛を競い、それぞれ愛の女神ヴィーナスと軍神マルスを頼って決闘するという主筋。そして副筋は、オフィーリア

を想わせる恋する乙女の狂乱を描く五幕四場構成の悲喜劇です。『ヨウサー』『カンタベリー物語』中の「騎士の話」と、ブルタルコス『英雄伝』中の「テーセウス伝」から材源を得ています。英国では、しばしば上演されていますが、日本では二〇〇三年五月、横浜で初演されました。作品の重要性から見て、今後ますます上演の機会が増えてくるでしょう。シェイクスピアの世界を新たに体験するという至福の時間をお楽しみください。河合祥一郎訳 四六判 二二二頁 定価二二〇〇円(本体二〇〇〇円) 1月中旬発売

# 「ビザンツ帝国史」

ポール・ルメルル[著]

ボスポロス海峡の岸辺に築かれた植民市「ビザンチオン」(現在のイスタンブール)を首都とした帝国は、独特な文化を育んだ。その歴史は、キリスト教が発展するにつれ内部で分裂していった事情や、ラテン語がギリシア語に取って替わられる経緯、キリスト教徒を異教徒から守る聖戦のはずだった十字軍がキリスト教国を滅ぼすに至った理由、古代ギリシア人の血統はどこまで保たれることができたかなどといった重要な事実を示唆し、歴史の知識を広め、認識を深めさせてくれる。本書は、東のローマとして誕生した三三〇年から、陥落する一四五三年までのビザンツ帝国の栄枯盛衰を、明快に語ってゆく。キリスト教徒と異民族との「文明の衝突」を描写した、世界史の基礎知識。西村六郎訳 新書判 一七六頁 定価九九円(本体九五円)

# 文庫クセジュ

一日に三時間しか睡眠をとらず、「不可能」を口にしない男 ナポレオンは、いかにしてわずかな十年でヨーロッパの半分までも支配する帝国を築いていったのか? 本書は、コルシカ島の下級貴族の息子として生まれながらも、軍事的統率力やプロバガンダの技術をも身につけた彼が、ヨーロッパの覇者に昇りつめるという栄華の果て、絶海の孤島で囚われの身のまま閉じたその生涯の軌跡を、丁寧に辿ってゆく。帝位就任後のナポレオンの性格の変貌をはじめ、彼がフランスおよびヨーロッパにおいて実際にどんな政策を繰り広げていたのかが、単なる英雄賛美に終わらない視座を保持しつつ、詳述してゆく。ナポレオン研究の権威による、簡潔に要を得た、ナポレオン伝の決定版。安達正勝訳 新書判 一八〇頁 定価九九九円(本体九五円) 1月下旬発売

# 「ナポレオンの生涯」

ロジェ・デュフレス[著]

「この話、友だちの友だちから聞いたんだけど……」と語り始められる『現代伝説』。興味本位に話される身近なうわさから、メディアやインターネットを通じて流布される醜聞まで、常に周囲にあふれている。本書は、トラックドライバーの復讐、モロッコで誘拐された少女、コペンハーゲンのボルノ写真、電子レ

# 白水Uブックス

## 「ある首斬り役人の日記」

フランツ・シュミット[著]

これは中世末期にニルンベルクの街に実在した死刑執行人が四十年余にわたって克明に記した日記である。日記の主フランツ親方は一五七三年に最初の一人を手にかけてから、一六一七年に退職するまで実に三六一人の犯罪者を刑場の霧と消えさせた。処刑される者たちは強盗や火つけ人、毒殺犯、贖金作り、売春、獣姦とまさに当時

## 「ヨーロッパの現代伝説 悪魔のほくら」

ロルフ・W・ブレイド[編]

「この話、友だちの友だちから聞いたんだけど……」と語り始められる『現代伝説』。興味本位に話される身近なうわさから、メディアやインターネットを通じて流布される醜聞まで、常に周囲にあふれている。本書は、トラックドライバーの復讐、モロッコで誘拐された少女、コペンハーゲンのボルノ写真、電子レ

## 「絵画の見かた」

ケネス・クラーク[著]

西洋絵画史上の名作16点を選んで、その作品の与えてくれる感覚的な喜びやその作品を生み出した画家の精神などを縦横に説き明かした絵画鑑賞の手引き書。印象批評だけに終わっていないところが本書の魅力である。レオナルド・ダ・ヴィンチの《聖アンナと聖母子》の画面構成を分析して名画とは何かを改めて考

## 「フランス中世史夜話」

渡邊昌善[著]

中世において、中小領主の次男三男は幼時から修道院に入ることが多かった。「父は滝のような涙を流し、同じく泣いている私を修道僧に託し、神の愛ゆえに異国へ送り出したのである。以来二度と父に会ったことはない」五歳の時に家族と別れ宗門に入った修道僧の回想である。一口に中世といってもその長さは

# 白水社の本棚

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24 / 振替00190-5-33228 / 電話03-3291-7811 / http://www.hakusisha.co.jp

# 名著を新書で! 【白水Uブックス】

\*表示価格は本体価格です。別途に消費税が加算されます。

エッセイ	小西聖子 880円 おしやべり心理学 柴田元幸 870円 生半可な學者 堀江敏幸 880円 郊外へ 松浦理英子 730円 ポケット・フエイツシュ 池澤夏樹 900円 ブッキッシュな世界像 吉田秀和 951円 文学のとき 杉本秀太郎 951円 異郷の空 ハリ京都・フレンチ 沼野充義 950円 屋根の上のバイリンガル 多田智満子 932円 魂の形について 澤口たまみ 854円 虫のつぶやき聞こえたよ 高田宏 950円 森村物語 拍瀨祐之 880円 ヒト、山に登る	紀行・歴史	中嶋浩郎・中嶋しのぶ 950円 素顔のフレンチエ案内 山田稔 1200円 旅のなかの旅 千野栄一 900円 ビールと古本のプラハ 浜本隆志 950円 紋章が語るヨーロッパ史 堀井敏夫 980円 窪田龍雄 920円 物語マリア・アントワネット ルノートル・ド・ラ・グランド 874円 ナポレオン秘話 アリノ大塚幸男訳 903円 エジプト女王秘話 クレオパトラ物語 種村季弘 951円 黒い錬金術 関山和夫 874円 落語食物談義 関山和夫 890円 落語風俗帳 関山和夫 951円 落語名人伝 関山和夫 932円 説教の歴史 仏教と語芸 都司正勝 880円 和数考
音楽・美術・演劇	フォルク・角倉一朗訳 900円 バツハ小伝 ティボー・栗津則雄訳 1180円 ヴァイオリンは語る 小池寿子 950円 屍体狩り 菊地信義 930円 樹の花にて 装幀家の余白 池内紀 951円 世紀末と楽園幻想 池田満寿夫 930円 池田満寿夫 絵画を語る 田中一光 930円 デザインと行く 井上ひさし 930円 演劇ノート 小田雄雄志 950円 道化の目 小田雄雄志 970円 小田雄雄志のシェイクスピア遊学 野村万作 890円 太郎冠者を生きる 戸田奈津子 930円 字幕の中に人生	須賀敦子/別役実	須賀敦子コレクション 880円 コルシア書店の仲間たち ヴェネツィアの宿 須賀敦子コレクション 950円 トリエステの坂道 須賀敦子コレクション 880円 ユルスナールの靴 須賀敦子コレクション 870円 ミラノ 霧の風景 別役実 980円 イーハートボキ軽便鉄道 別役実 880円 満ち足りた人生 別役実 970円 台詞の風景 別役実 870円 日々の暮らし方 別役実 900円 電信柱のある宇宙

学びやすさと規模を兼ね備えた画期的学習中辞典

# フロイデ 独和辞典

前田敬作監修、山本雅昭、岸孝信、服部尚己、友田和秀、松村朋彦編

B6変型 / 1937頁 定価4200円(本体4000円)[2色刷]



よく分かる学習辞典のナンバーワン

# デイコ 仏和辞典

中條屋進、丸山義博、G.メランベルジェ、吉川一義編 シングルCD付

B6変型 / 1817頁 定価3990円(本体3800円)[2色刷]



解説が詳しく用例が豊富な中国語辞典の最高峰

# 白水社 中国語辞典

伊地智善継編

B6判 / 2355頁 定価8190円(本体7800円)



よく分かる学習辞典のナンバーワン

# 現代スペイン語 辞典【改訂版】

宮城昇・山田善郎監修

B6変型 / 1536頁 定価4200円(本体4000円)[2色刷]



## 『中国語の入門』(CD付新版)

山下輝彦[著]

これから中国語を始めるなら、定番のこの一冊をお勧めします。基礎から無理なく学べるよう、各課は学習事項を1つに限定。左に例文と新出単語、右に解説と練習問題の形式で、読みやすさと分かりやすさはバツグンです。コンパクトなサイズと見開き2ページ完結の構成は、普段の学習にはもちろん、電車の中など持ち歩いてちょっと読むのにも便利。巻末には会話・やさしい読み物・分類式の単語集を収録し、これ一冊で初級に必要な事項を網羅しています。CDがついてお買い得になりました。

四六判 246頁 定価1995円(本体1900円)

## 『コレクションフランス語 語彙』(CD付・新装版)

鳥居正文、金子美都子、田島 宏[著]

一つの語は、いつも他の語との関連や文脈の中にあってはじめて意味を持ちます。本書では、第1部でフランス語の語彙の仕組みと、基本的な動詞・形容詞の用法を解説、第2部で、日々の暮らしに欠かせない「身体」「衣服」「食事」「住居、家」「都市、町」「家族」「健康、病気」「交通、旅行」「職業、仕事」「天気、天候」「感情、理性」という11のテーマ別に語彙をまとめた上で、さらに近い意味の語や関連語をグループに分け、例文を通してニュアンスの差異を説明していきます。索引で検索も可能。「読む日常語小辞典」といえるでしょう。

A5判 264頁 定価3150円(本体3000円)

## CD エクスプレス



ベストセラーの入門シリーズ《エクスプレス》にCDが付いた！速く着実に「読み・書き・話す」ための基礎がマスターできると大好評。語学の白水社が贈る、入門書の決定版！

## 『CDエクスプレス アイヌ語』(CD付)

中川 裕、中本ムツ子[著] A5判 135頁 定価2940円(本体2800円)1月下旬発売

## 『CDエクスプレス トルコ語』(CD付)

大島直政[著] A5判 150頁 定価2520円(本体2400円)1月下旬発売

### 編集者メモ

採用面接で「夏はよくモングルへ行きます」と言ったところ、入社時には社内知れ渡っていた。まあ、モングルのリピーターは珍しいから仕方ない。旅の目的は「地平線まで続く草原で馬に乗る」という、日本人の抱くベタなモングル像の実践である。だが、大草原は爽やかなイメージだけでは語れない。数日間髪を洗えず、食事に虫が飛び込みトイレは青空の下。苦勞の末も出たことだし。(ウ)

### 営業部だより

白水社に入社してはや三十七年、卒業の日が近づいてきた。オイルショックによる紙不足や不売運動、消費税問題業界のマイナス成長と人文書を中心にした取次会社の倒産などいろいろなことがあったが、出版界で働けたことはとても幸せだったと思う。書籍は一冊一冊に個性主張があり文化の一端を担っているのだという自信と誇りをもって仕事が出来たし、書店さんとの情報交換や大学を訪問して先生方とお話するのも楽しかった。これからは今迄とは違う生活を送ることになるが、新年末年始、帰省に観光にと鉄道を利用した方も多かったでしょうが、旅の楽しみが倍増するのが原武史の『鉄道ひとつばなし』。『ピエーどおり』鉄道の見方が変わる珠玉の全76話で、専門の政治思想史の知識で随所を引き締めつつひたすら鉄道へ熱いエールを送った一冊だ。

「帝国」の栄光を一身に集めてきた横須賀線がいまやたんなる一通勤路線になり下がったと嘆くかと思えば、痴漢の発生に考察をめぐら

## 本の十字路

し、はたまた、駅そばのチェーン店化に警鐘を鳴らす。「海の見える車窓十選」などの息抜きもあり。さて問題何時何分までであれば、それぞれの県にあるどの駅から列車に乗ってもその日のうちに東京駅に着けるか？つまり東京に出づらいついのある県ランキング。一位と二位はなると九州でも四国でもない。著者も数回こもって答えを見つけたという。

## 黒田龍之助の 語学書書評



### 『自習ドイツ語問題集』

これはとてもオーソドックスな問題集である。新しい語学参考書が次から次へと出版される中で、どうしてこの本を取り上げるか？それは私が大学生時代にこれでドイツ語を勉強したからである。本来、こんな発想ではいけない。自分が習った教科書を、教える側になってもまだ使っているようでは、進歩がない。どんなに優れたものがあっても、それを乗り越える努力をするのが教師である。だが私はドイツ語教師ではないので、乗り越えなくていい。

大学二年生のとき、第三外国語でドイツ語をとった。だが一年はあつという間に過ぎてしまい、文法の細かいところはあやふやのまま。よくある話である。もうちょっと勉強しなきゃと考えて、春休みには何か問題集をやることにした。これまたよくある話である。数ある中でこの『自習ドイツ語問題集』を選んだのは、とにかくオーソドックスだったから。第1課だけちょっと違うが、基本は左ページが説明解説、右ページが問題という構成で、最後までこのパターン。このようにきれいにまとめるのは、著者もすいぶんたいへんだつたらうな。なんて思うのは今の立場になつてから。当時はそれよりも一回の分量が一定のところに入った。課によつて分量が多かつたり少なかつたりすると勉強しにくい。問題集をやるときには「歯を磨くように」と心に誓う。つまり毎日やること。それから一定の時間やること。日によつていいえなかったり、雑だつたりするよつな歯の磨き方はいけないと思う。

全七十五課なので、春休みに始めれば、四月半ばくらいまでにナントカ終わる。一日だいたい十五分ぐらい。ダイエツト器具の宣伝みたいだが、私はこれが最後まで続きました。で、こういうものは一回やればおしまいというものではない。人は忘れるのである。新学期からさらに勉強するのならともかく、他の授業が始まればそうそうドイツ語ばかりもやつてられない。だから、忘れた頃にまたやり直す。わたしは翌年の春休みにもう一度やった。今度は倍のスピードで進む。これは気分がいい。だいたいどこに何が書いてあるか頭に入ってくる。そうならばしめたものだ。繰り返しやるから、オーソドックスがいいのである。

(筆者) 明治大学理工学部助教授

### 『自習ドイツ語問題集』



ドイツ語の基礎的な文法と作文を中心に編まれた問題集。全75課、各課は左頁に文法解説、右頁は問題で構成。問題は約1250題。大学1年生や初めてドイツ語を習う人に最適。

尾崎盛景・高木実著

B6判 / 204頁 定価1575円(本体1500円)